
きらめきの彼方へ

ロキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きらめきの彼方へ

【Nコード】

N5490A

【作者名】

ロキ

【あらすじ】

いじめられた過去がある主人公（亜美）はいじめられている人の闇を取り除き、いじめてる人に裁きをくだすBlack Angel（黒い天使）と、言う仕事をやっている。いろんな人の心の闇とは？

ブローグ

いつだっただろうか。いじめと、言う辛さを知ったのは。

あの時まで幸せだったのにいつのまにか、つらくなった。これも時間の流れなのか。

第二話過酷とは？

私はいじめにあった。何も理由もなく。ただ地味で暗くて…それだけだった…そんな勝手な理由で人の心をズタズタにした奴らを許せなかった。奴らに復讐してやりたかった。それが、私の闇だった。それをきっかけにBlack Angelの事を知った。それから私はBlack Angelに入った。

きっかけはこんなので良かったのか…
今も思う。

Black Angelの仕事は心の闇を取り除き回収する事、闇を作った人に裁きをくだすこと。おおまかに言えばそういうことだ。Black Angelには階級が存在する。一番下が兵士、次が見張り人、上等兵、幹部、そして一番上がボス。

そんなに難しいことはない。だが、誰でも入れるわけがなかった。ただ、

「いじめられたから入りたい」

と言う簡単な事だけじゃはいれないのである。

ちゃんと兵士から修行するのである。兵士の修行は過酷で辞める人が後を断たない。

だから、本当にやりたい人しか残らない。私もそうなのだ。最初は

「もういじめられたくないから」

と、言う理由だった。兵士時代過酷な労働をやらせられた時、

「やっぱり本気で、なりたいんだな。」

と実感したぐらい重労働だった。

しんどくて、自分を毎日追い詰めて自分と毎日向き合って…

心理的にボロボロだった。

訓練も自分がもしこう言う状態だったらとか、友達がもし心が痛んでいたらどういふ対応するかを、学んだ。

第3話会議・話の発端

（見つけた。仕事だ。）私は心の中で思った。

亜美のクラスは一組だがいじめられていると、思われる子は三組だった。その子とはいくらか話した事があるぐらいであり面識がなかった。

「名前：なんて言うんだろ？」

その子の後ろ姿を見ながらポツリと言った一言。

「かなり、ひどいな。早くしなければ：闇に支配されて、引きこもるか、追い詰めすぎて自殺するか。」

さすがに、亜美も周囲の目を気にし始めた。周りからはヒソヒソ声が聞こえる。

「私としては、引きこもりの方がまだいいんだが：自殺だけはするなよ。」

と、言い残し自分の教室へ帰って行った。

いったい誰に向けた言葉だったのか：

放課後になった。亜美は情報を求めて部下たちを図書室に呼んだ。もつとも、部下と言っても5人しかいないのだが：「どーしたものでしょう…」

と、眼鏡をかけた黒髪の少年は困り顔で言う。「ほっときやいのよ。」と、金髪の美少女が答える。

「そんなあゝそれじゃあ遅いですよ。」

「あつそ。あれ：後の二人は？」と、金髪美少女は離れた所に居るちよつと不良気味な男に話かける。

男はツツパッタ言い方をする。

「はあ？知らねえよ。」 亜美はため息混じりで言った。

「しょうがないわよ。あの二人は逃げてるだけだから。」

「まったく先輩だからって、亜美の言うこと聞かないんだから…」

たくっ！ムカツクぜ。」

「ケン。言葉使いには気を付けなさい。」

亜美は淡々と喋る。亜美はクールでいつも冷静なのだ。あの不良はケンと言うのか…

「水野、マナ仕事だ。」

水野と呼ばれた眼鏡の少年とマナと呼ばれた金髪美少女は…

「ハイッ。指揮官」

と、同時に返事をした。

「ケンもね…」

ケンは二人に比べてだるそうに返事をした。

「あゝはいはい。」

「まっいいか。これにて解散。なにか情報があったら連絡よろしく。解散！」

これで会議は終わった。

第4話現場と約束

亜美は図書室から出ると、女子トイレから叫び声が聞こえる。

「助けて、誰かあ」

と、大声で言っているのが聞こえる。

亜美は女子トイレに近付いた。走ると、足音が響くので走れないのだ。

そつと、ドアの隙間から見る。一人の周りに三人ぐらい取り囲んでいる。

「お前さあ優等生ぶってんじゃあねえよ。何、点数稼いでんだよ。」

と、言い真ん中にいた女子の胸ぐらを掴み脅している。「点なんか稼いでません。」

と少女は反論する。

「何言ってるの？ウチラに反論するの？」

「反論はしないほうがいいよ」

「そうそう。」

残りの女子が言う。「まっ今日はこの辺にしようか。下校時刻だし。」

「そうだね。」

と、二人のなかのひとりがいう。

「告げ口なんかするなよなあ」

「じゃっ。バイバイ」

と、言い女子トイレから出て言った。

行った後も笑い声が聞こえる。どうやら、亜美には気付かなかった。

亜美はいじめられてた少女に近づく。「点なんか稼いでません。」

と少女は反論する。

「何言ってるの？ウチラに反論するの？」

「反論はしないほうがいいよ」
「そうそう。」

残りの女子が言う。 「まっ今日はこの辺にしようか。下校時刻だし。」

「そうだね。」

と、二人のなかのひとりがいう。

「告げ口なんかするなよなあ」

「じゃっ。バイバイ」

と、言い女子トイレから出て言った。

行った後も笑い声が聞こえる。どうやら、亜美には気付かなかったらしい。

亜美はいじめられてた少女に近づく。 「大丈夫？」
と、声をかける。

「ありがとう。さっきの…秘密にしといてくれない？」

「ああいいよ。突然だけど名前教えて？」

少女はびっくりしたようだ。

「いいよ。でも、あなたの名前も教えてね。」

「いいけど。」

「私の名前は鈴木絵美。」

「私は東大寺亜美。よろしく。」 「絵美。なんか悩みごとがあったら相談にのるから。」

「えっでも…」

と、絵美は口ごもる。

「名前を教え合ったんだから知らない人じゃないだろ。」

「そうだけど…」

また、口ごもる。 「誰にも言わない。約束。」

亜美は小指をだした。

「や・く・そ・く」

「うん。じゃあ今でもいい？」

「ああいいよ。何時間でも聞いてあげるから。」

絵美は話始めた。「絵美。なんか悩みことがあったら相談にのるから。」

「えっでも…」

と、絵美は口ごもる。

「名前を教え合ったんだから知らない人じゃないだろ。」

「そうだけど…」

また、口ごもる。「誰にも言わない。約束。」

亜美は小指をだした。

「や・く・そ・く」

「うん。じゃあ今でもいい？」

「ああいいよ。何時間でも聞いてあげるから。」

絵美は話始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5490a/>

きらめきの彼方へ

2010年12月18日17時28分発行